

# Paul

Layback

「そんなにじっと見ても顔は変わらねえぞ」

後ろから宇宙人のポールがごちゃごちゃと言ってくる。

「うるさいなあ。居候のくせに」 メグは手鏡をさらに顔に近づける。

「目の下のほくろが最近大きくなってから気になっちゃってね。病院で取ってもらおうかな」  
べつにポールに話しかけていたわけではなかった。ただのひとりごとのようなものだった。

「なんならおれが取ってやろうか？」

身を乗り出すようにしてポールが鏡をのぞき込んでくる。

ポールの身長はわずか1メートル足らず。

地球上に落ちてくる宇宙人の中では比較的小さな部類だった。

メグが大学の帰り途に、側溝で死にかけていたポールを拾ってから、かれこれ数カ月が経つ。  
最初は少し気持ち悪いと思った彼ののっぺりとした顔つきも、今ではかわいいとすら感じられるようになっていた。

「取ってやろうかって、そんなことできるの？」

「地球人のほくろぐらい楽勝だよ。太陽に頼まれて黒点を取ってやったこともあるくらいだからな」

ポールはえらそうに腕組みをして、カーペットの上を歩きまわる。

「ふうん。じゃあ、おねがいしようかしら」

「オーケー。メグにはいつも世話になってるから500ドルで手を打とう」

「ばっかじゃないの。居候のくせに。あんたの明日の朝ごはんは抜きね」

「わ、わかったよ。ただでやるよ。ただでやるから。そのかわり朝食の目玉焼きの玉子は2つでたのむ」

口は悪いくせに、メグがちょっとでも強気に出ると、あわてふためいてすぐに譲歩する。

朝食の玉子の増員をアピールするだけなのに、やたらと大げさな身振り手振り。

なんとも愛嬌のあるポールのそのしぐさに、メグはついつい笑ってしまう。

「しょうがないなあ。じゃ取引成立ね。で、手術はいつするの？」

「手術なんてそんなたいそうなもんじゃねえよ。お前が寝てるあいだにちゃっちゃと取っというやるよ」

「ねえ、それって、痛い？」 メグは上目づかいでポールにたずねる。

「おれを誰だと思ってんだ」 ポールのつぶらな瞳が黒曜石のようにきらりと光る。

「地球人の医者なんかと比べてもらっちゃ困るね。痛みなんてみじんも感じさせねえよ。前にバジル星でバージンの女の子のナンパに成功して性交したときも――」

「ああ、もういいもういい。あんたのそんな生々しい話は聞きたくないの。とにかく痛くしないでよね」

「まかせろよ」

ポールはすべすべとした自分の胸をこぶしでどんと叩いた。

「そろそろ寝なきゃね。明日はあたし、朝から物理の授業だし」

「先に寝ていいぜ。おれは今から故郷との交信を試すから。そのあとにお前さんのほくろ取りだ」

ポールはそう言って、メグが部屋の中央にレゴで作ってあげた空飛ぶ円盤型の家に入っていく。

「おやすみポール。あとはおねがいね」

「ああ。おやすみメグ。いい夢を」

ポールは静かにドアを閉めた。

朝目覚めると、ほんとうにメグの顔のほくろは消えていた。

メグは手鏡をのぞき込む。ほくろのあったところを指でなぞる。痛みも違和感もまるでなかった。

少しさびしいような気はしたものの、胸に引っかかっていたものが取れたように感じられて、メグはうれしかった。

「ありがと、ポール。あなたもたまには役に立つわね」

「ふん。たまにはとはなんだ、たまにはとは。目玉焼きの玉子は2つだからな。忘れんなよ」

「わかってるわよ」

いい気分だったのは、ほんの一瞬だった。

メグは朝食の前にシャワーを浴びに行き、唖然とした。

「ポーーーーール！ ちょっと来て！」

「なんだ、どうした！」

ポールはあわててバスルームへ駆けていき、目一杯背伸びをしてガラス扉を開ける。

「きゃあっ！ レディのはだかをのぞくな！」

メグは小さな胸を腕で隠して、ポールの顔にシャワーを浴びせる。

「なんなんだよ。地球人の女はめんどくせえな」

濡れネズミになったポールは舌打ちをして扉を閉める。

すりガラスの向こうから、メグのくぐもった声が聞こえてきた。

「ポール？ あんた、昨日あたしになにかした？」

「なにしてほくろを取ってやっただけだろ。いくら野良宇宙人のおれだってお前さんの寝込みを襲ってバージンを奪おうとするほど落ちぶれちゃー」

「バ、バ、バージンちゃうわ！ ばかっ！」

メグはバチンとガラスを叩いた。

「ああ、そういや顔のほくろを取るついでに体中のほくろも全部取っというてやったよ。どうせいらぬものなんだから？」

「あのね、ポール。よく聞いて」メグの声が急に小さくなる。

「あたしのね、かわいらしい乳首がなくなってるんだけどー」

「乳首？」ポールはきょとんとする。

「ああ、お前の平べったい胸に2つばかりついてたあれか。なんだよ。ほくろじゃなかったのかよ。真っ黒だったからおれはてっきりー」

「ばかーっ！！！」

メグの声のあまりの大きさにポールは後ろにひっくり返った。

「お、おい、大丈夫だって、その乳首とやらは、まだお前の部屋のゴミ箱の中にあるはずだし、今日の夜にでもまた取りつけてやるから、な？ もちろんただでだぞ。金は取らない。だから泣くなって、な？」

ポールはすりガラスにヤモリのようにべっとりと張りついて必死にメグをなだめる。

「ばかばかばかばかーっ！ もうお嫁に行けない、うわぁーん！」

「だから大丈夫だってば、おれがなんとかしてやるから、な？」

ポールは赤子をさすように、なんども同じことばを繰り返した。

嫁のもらい手がなければおれがお前をもらってやる。そう口にしてしまう誘惑に駆られながら

。

